

つむぎうた

物部俊之

つむぎうた 作 物部俊之

一郎 祖父

菊江 祖母

恵子

隆雄 父

壺子 母 いつこ

機屋

染め屋

菊江、静かに。

菊江 孫が二人おります。姉は高校一年生、恵みの子と書いて恵子と読みます、妹は小学三年生、幸せと書きまして幸と申します。とても可愛い孫達で、電話口では、ばっちゃん、ばっちゃんと呼んでくれています。

私は不便な山村で、なにやら限界集落とお偉い方たちはおっしゃるそうですが、十軒の農家が自給自足に近い生活をしております。そのような場所でございますから、可愛い孫達にもなかなか会うことが出来ません。それが少なからず、不満ではありますが、思えば、戦争が終わって六十余年余り、戦後、戦地から戻ってきたばかりの夫のたつての希望で、この山村に越して参りまして、今更、町で暮らす自信もございません。

元々、体の弱かった夫はこちらに越してから、三年で亡くなりました。夫には申し訳ないのですが、畑仕事をし、息子をこの細腕一つで育てるのに懸命で、夫のことも、いつしか忘れてしまっておりました。ただ、孫の幸が亡くなるまでは。（一つ間をおいて）息子からの電話で孫の幸が亡くなったこと、そして幸の遺骨を姉の恵子がすべて食べてしまったのを見た妻の逸子が、恵子が鬼になったと狂ったように叫び、恵子を強く責めていると息子から聞かされたとき、冷たいばっちゃんです。嘆き悲しむよりも、どうしてだか、私は、二十歳になる前のこと、出征する未来の夫を送るその姿を思い出したのです。

出征前の菊江と一郎。

菊江、無邪気なくらいに。

菊江 この戦争も今こそ、踏ん張り時です。しっかりね、一郎様。お国のために頑張ってくださいね。この国はあなたの肩にかかっているのですよ

一郎独白 菊江さんで見合いをし、結納も済ませた後、来るべくしてきたのが、赤い色をした召集令状だった。来るのがわかっていて見合いをするという不可思議、結婚を家同士の繋がりと捉えるのなら、俺が戦死すれば、弟の妻になればよいということか、それとも、帰って来い、待つものがあるのだぞという温情か。

一郎、搾り出すように。

一郎 君はこの戦争は間違っている、全くの無為であるとは思わないか

菊江、呆れたように、元気よく

菊江 何をおっしゃいますの。この国を征服せんとする、まさしく鬼の国から、あなた様は、自らの手でこの国を守ろうというのですよ。なんという名誉なことでしょう。私が男でございましたら、喜び勇んで、戦地に赴きますわ。（銃撃の口真似）だだだだっ、だだだだっ、我、神国の尖兵なり。鬼の国を滅ぼし、いざ行かん

一郎独白 君とはちょうど五歳違いだ。私の世代は、ぎりぎり、この戦争に疑問を抱くことができるのだよ。君、私の命はどうなんだろうね。名誉とやらと、私の命、どちらが大切なのかね。国の行く末と、私の命、君はどちらが大切だと思うのだろうね。おのが命が風前の灯火となったいま、初めて、誰の命というのではなく、すべての命が大切なのだということに気が付いたよ。今頃気づくなんて、愚かなことだね

父親と母親の会話、静かに。

母親、力なく、憔悴したように

母親 幸を食べてしまった恵子は、死者を食らう餓鬼、まさしく鬼です。私は怖くて、もう、一緒に暮らしていけません。きっと、私もあなたも恵子に食べられてしまいます

父親、焦って。

父親 待ってくれ。君は母親だろう、本来、母親は子供を庇うものじゃないのか

母親 あなたにはわからないのです。夕方、窓から流れ込んでくる眩しい西日の中であの子が一人で喋っているのです、楽しそうに笑っているのです。きっと、恵子の回りには見えない鬼が何匹もいるのです。そして、相談しているに違いありません、次は私を食べようか、それとも、あなたを食べようかと。もしも、あなたが夜、仕事から帰ってきて、私がいなければ、冷蔵庫を開けてください。きっと、冷蔵庫を開けたら、食い残された私の足がごろっと転がっています

父親、その場をとにかく納めようと。

父親 わかったよ、わかったから、肩の力を抜きなさい。幸い、夏休みが始まる。恵子は田舎の母さんに頼もう。山の中で、自然に囲まれた生活を送らせよう。しばらくは君も恵子と別れて暮らさなさい。さあ、落ち着いて。そんな気を張り詰めてばかりいると、君がまいってしまうぞ。

蝉の声。菊江の畑にて。

恵子 ばっちゃん、孫をこき使い過ぎ

菊江、笑って。

菊江 畑仕事はきついからねえ、立っているものは可愛い孫でも使え。助かっているよ

恵子 ばっちゃんは調子がいいんだから。ん、ここの畝の草は抜かないの

菊江 そこに鋏があるだろう。五センチくらいの高さに切りそろえておくれ

恵子 草を抜かないの

菊江 ああ、爺さんのいいつけなんだよ

菊江、少し笑う。

菊江と一郎、畑にて。

菊江 笑われていますよ、お父さん

一郎 笑われて……。何か面白いことでもしたかな

菊江 どちらかという、嘲るという意味の笑われているです

一郎、少し笑って。

一郎 君は言葉がきついなあ。まっ、いいじゃないか、それより、菊江さん、この支柱を畝の両端に打とう、えんどう豆を植えるからさ。柱を支えてくれないかい、私が畝に打ち込むよ
杭を打つ音、二回・

一郎 もう一つ、よいしょっと

杭を打つ音

一郎 うん、しっかりした。後は縄を張ってね、春には筍とえんどうの炊いたのを食べたいな

菊江、大袈裟に溜息をついて。

菊江 今度は失敗せずに美味しいのを作ってあげます

菊江独白 この人は雑草を抜かない、命を奪うのは辛いという。だから、鋏を持ってきて、散髪屋のように雑草を短く刈るのだ。村の人は変わり者だ、怠け者だと嘲笑う。田舎で、他人と違うことをするのは難しい。でも、この人のやわらかい笑顔をみると、まっ、しょうがないと思えるのだ。この人は戦地でどんな経験をしたのだろう、この人は決して戦争の話をしてない、尋ねてものりくくりとかわすのだ。

菊江と恵子

恵子 ばっちゃん、泣いているの

菊江 ん、こんな孫でも手伝ってくれると思うと嬉しくてねえ

恵子 父さん、言ってた。ばっちゃんはとっても恥ずかしがり屋だから、なかなか、本当のことを言わないって

菊江 あんな可愛かった息子もそんな生意気な口をきくおっさんになってしまったんだね。

はあ、鶴亀鶴亀

恵子、楽しそうに笑う。

恵子、戸惑うように、でも、思い切って、

恵子 あのね、ばっちゃん

菊江 なんだ、改まって

恵子 あの、夏休み終わってから、ばっちゃんちに住むの、どうかな

菊江 ばっちゃんは楽しいけれど、高校、どうするんだ、とても通うことなんかできないよ

恵子 高校は義務教育じゃないからいいんだ。ね、私、とってもばっちゃん孝行するよ。水汲みも畑仕事も頑張るよ、だから、だから……

菊江、溜息をついて、

菊江 困った孫だねえ。まあ、でも、この畑はじいさんとの宝物だし、山に帰してしまうのは寂

しい、動けなくなったときの介護のこともあるからねえ。孫をこき使うかねえ

恵子、畳み込むように

恵子 ばっちゃん、動けなくなったら、私がお風呂入れてあげるよ、お手洗いにだって、一緒に行くよ

菊江、笑って、

菊江 恵子の父さんから、話は全部聞いているよ、話さなくてもいいことまでさ。あいつはいつまで経っても生真面目で不器用だ、じいさん似だねえ。恵子、ここで暮らした。ばっちゃんも楽しい

恵子、元気に。

恵子 頑張ります

離れたところから。

機屋 おおい、ばあちゃん

菊江 なんだ、機屋かい。孫からばっちゃんって呼ばれるのは嬉しいけれど、お前さんは、名前を呼んどくれ

機屋 年寄りの頑固なのは嫌われるよ、菊江さん。その子が孫の・・・

恵子 はじめまして、恵子といいます

機屋、楽しそうに。

機屋 可愛い子だ、菊江さんも可愛い女の子だったんだろうね、面影ないけど

菊江 お前さんが染め屋ちゃんと双子だとは信じられないよ

機屋 そうだね、姿一緒の一卵性双生児なのにさ

機屋、改まって、恵子に。

機屋 私は静香。でも、機織りをやっているから機屋って呼ばれている。妹は山の中、何処かにいるだろうけれど、染色をやっていて染め屋って呼ばれているんだ

恵子 機屋さんと染め屋さん

菊江 こいつらは市の幹旋で、なんとか事業の一環でやってきた若造だよ

機屋 地域振興事業だよ。ここも、昔は葉タバコの生産で人も多かったけど、今は十軒、十五人の小さな集落だ。市の予算が降りたからさ、私と妹が空き家を借りて、ここで機織りと草木染をしている。ここは何もないところだけれど、時間と自然だけはふんだんにある。妹の草木染の色は自然からいただくからさ、こういうところで暮らすのが都合良くてね

菊江 姉は口も態度も悪いけど、妹は静かでいい子だよ。恵子も見習うなら、染め屋ちゃんを見習いな。双子で顔は同じなのに、頭の中はえらい違いだ。

機屋、楽しそうに。

機屋 妹を褒めてくれるのは嬉しいけど、引き合いに出されるのはつらいなあ。そうさ、後でさ、恵子ちゃん、うちにおいで。年寄りとはばっか、喋っていると、頭の中がよれよれの婆さんになってしまうぞ

菊江 本当にお前は口が悪い、人間はまっとうなんだけどねえ。それで、作品とやらは出来たのかい

機屋 妹が紅い色を探してくれている

恵子 色を探す

機屋 そう。草木染はどんな植物がどんな色を持っているのか、探してまわるんだ

恵子 とても、嬉しそうな笑顔ですね

機屋 私が。なんか、照れるなあ、集落東端、からころって機の音が聞こえたら、それが私たちの家だ。遊びにおいで

恵子 ありがとうございます

機屋 楽しみにしてるよ。そうだ、昨日、ばあちゃんに貰った菜っ葉の炊いたん、美味しかった、ありがとう。お皿、勝手知ったる他人の台所、返しておくよ、じゃあね

菊江 鉄鍋に、きゅうり、ごま油で炒めたのがあるから、半分、持って帰りな

機屋 ありがと、ごっあんです

機屋、退場。

恵子 元気な人だね。人生が楽しくて仕方がないって顔をしている。

菊江 あいつらのおかげで随分、賑やかになった。ばっちゃんもね、料理を作るのが楽しいんだよ

恵子 機屋さんって、なんか、いい人だね。機織と草木染か。やってみたいな

菊江 遊びにいったいで。機織のいろんな道具があったよ

恵子、おどけたように。

恵子 草刈りと水遣りが済んだら行きます、日射病でばあちゃん倒れたら大変だ

菊江独白 恵子の様子は変わらない、今までどおりだ。どうして、恵子は幸の骨を食べたのだろう。あんなに仲の良かった姉妹。それに幸が亡くなって間がないというに、変わらずに恵子は笑顔でいる。幸のことを忘れたようにいる。そういえば、電話で、恵子の独り言が多い、まるで誰かいるように楽しく喋っていると言っていた。本当に恵子は誰かと喋っているのか。そういえば、じいさん、化石の話をよくしていた。この山も大昔は海の底で、海の化石がたくさん出てくるんだとか。親は子供へと、命を繋いでいく。化石はそれが出来ないから、骨になって、何万年も土の中で命を繋いでいくだよと。ああ、それなら、恵子は幸の命を継ぐために、化石になった幸の骨を食べたのかもしれない

菊江と染め屋

染め屋 どうなさいました。泣いていらっしゃるの

菊江 あ、いやいや、なんでもない。ん、染め屋ちゃんか、どうしたんだい

染め屋 姉を探しているのですが

菊江 機屋なら、皿を返しにうちの台所へ行ったよ

染め屋、笑みを浮かべ。

染め屋 菜っ葉のたいたん、美味しくいただきました。おばあさまには、お料理を教えていただきなくちゃ。とっても美味しいのですもの

菊江 ただの田舎煮だよ。あんたらがやって来てくれて、楽しんでいるよ。そうだ、聞かせて欲しいんだ、姉妹ってお互いをどう思っているんだろうね。機屋と染め屋ちゃんは随分違うわね 染め屋、笑うように。

染め屋 違いますか。どうしてでしょう。体つきも顔もそっくりですよ。鏡が要らないくらいです。こんなに似ているのなら、一人いらんんじゃないかってくらいですわ

菊江 でも、どうしてさ、そんなに喋り方や雰囲気が違うんだい

染め屋 姉は責任感が強いのですよ、私を守らなきゃって思ってくださるから、つい、言葉が荒くなってしまいます

染め屋、照れたように笑う。

染め屋 私はそんな姉に甘えてばかりですから。そうだ、背中の籠に、よいしょっと

菊江 オトギリソウだね、随分、見つけたね

染め屋 お山から、一抱えも頂いてしまいました。成長が良いですね、普通でしたら五十センチくらいですのに、1メートルはありますわ

菊江 それをどうするかね

染め屋 姉が喜びます、昔の人はオトギリソウの繊維で布を編んだとか、常々、姉も機会があれば編んで見たいと申しteおりました。あとは、私も残ったのをいただいて、煮出してみようかと。オトギリソウから良い色をいただけるかもしれませんわ。大切な命をいただくのですから、無駄にだけはしたくないのです

菊江 命か。確かにそうだね、本当にそうだ

染め屋 どうなされました、お寂しそう

菊江 孫のことを考えたらさ。なんでなんだろうね

染め屋、一つ、溜息をついて。

染め屋 姉でしたら、しっかりしろ、ばあちゃんって怒鳴ってますわよ

菊江、笑って、元気に。

菊江 確かにそうだ、あいつなら言いかねないね

染め屋 おばあさま

菊江 ん

染め屋、声を静めて。

染め屋 オトギリソウは、血止めの薬草でもありますのに、弟を切ると書くのですよ。なんて、物騒なこと。切ってはなりませんわね、弟も妹も

逸子（恵子の母親）独白

逸子、低く思いつめたように。少しずつ、早口になっていく。

逸子 あなたは会社勤めで家にいらっしゃらないからわからないのです。あれは鬼です。きっと、私たちの目の届かないところで恵子はあの鬼に食われ、鬼が恵子に化けているのです、そして、幸を食べ、味を占めたあの鬼は、あなたも私も食べてしまおうとしているに違いないのです

逸子 妹を食べるなんて、あれは恵子ではありません。あなたにはわからないのですか。あれは

鬼です、大切な恵子に化けた鬼なのです。私は恵子と幸の母として、あの鬼を退治せねばならないのです

恵子と機屋と染め屋

染め屋 あなたが恵子ちゃんね。どうぞ、お入りなさいな

恵子 えっと・・・、染め屋さん。

染め屋 正解。姉ももうすぐ帰ってきます。さあ、どうぞ、お入りなさい

恵子 おじゃまします

恵子、部屋に入る。

染め屋 おざぶ、使ってくださいな

恵子 あ、ありがとうございます

染め屋、にこやかに、軽く問うように

染め屋 恵子さん、緊張している

恵子 あはは、さっき、機屋さんに会いましたから、ちょっと

染め屋 なるほど、戸惑っているんだ。同じ姿だものね。さ、お茶をどうぞ

恵子 ありがとうございます。あ、ハーブティーですね

染め屋 その仲間かな。その籠に一抱えも草があるでしょう、それがオトギリソウ、少しいただいて、暑く熱した鉄鍋で炒って、お茶にしたの。

恵子 見たことがない草です、まっすくで、綺麗な

染め屋 町にはないからね。オトギリソウはお腹の薬にもなるし、ヨモギと同じ、怪我をしたときの血止めにもなるのよ

恵子 オトギリ、オトギリソウ

染め屋 弟を切ると書いてオトギリソウ、血止めの薬にもなるのにね。秋には、この緑の葉が血飛沫を受けたように赤くなるの。多分、そんなところから、こんな名前が付けられてしまったのかもしれないね

恵子 染め屋さんって、機屋さんと、喋り方がなんだか違う

染め屋 姉さんはしっかりしているし、私は姉さんの引っ付き虫だから

染め屋 姉さんと一緒にいたくて、一緒に出来る仕事をとって草木染を始めたくらいなのよ

恵子 なんとが、いいですね

染め屋、そっと笑って

染め屋 いつまでも、姉さんに依存してはいけないって、わかっているつもりなんだけどな。恵子さんもお姉さんなの

恵子 え

染め屋 ううん、恵子さんって、ちょっとお姉さんっぽいなって思ったから

恵子、思い切るように。

恵子 幸、妹の名前です。妹は私のお腹の中にいます

染め屋、不思議そうに。

染め屋 どういうこと

恵子 春、病院で幸は亡くなりました。いつも、姉ちゃん、姉ちゃんって、笑いながら抱きついてきてくれたんです。とっても幸せそうな笑顔で姉ちゃん、大好きって言うてくれるんです、姉ちゃんも幸が大好きだよって、私も笑っていたんです。それが、急に・・・。

私、病室で幸を抱きしめて泣いたとき、ふっと、幸の中から、私のお腹に暖かいものが入った気がしたんです。きっと、これは、幸が、天国に行くのもやめて、風になるのもやめて、私と一緒にになってくれたんだ、そう思ったんです。なんだか、初対面の人に変な話をしてしまっ、ごめんなさい

染め屋 難しいことはわからないけれど、幸ちゃんの命が、恵子さんの中で続いているのかもれないね。そんなお姉さん、羨ましいな

恵子 機屋さん、とっても、染め屋さんのこと、大事に思っていますよ

染め屋、うふふと小さく笑う、含みを持たせた感じ。

機屋、帰ってくる。

機屋 ただいま。おや、恵子ちゃん、来たね。、折角だし、晩御飯もうちで食べよう

恵子 嬉しいけど、ばっちゃん、寂しがるかもしれない

機屋 それもそうか。ばあちゃんの孫、とったら可哀想だね

染め屋 なら、私たちがおばあさまのところへ、晩御飯の用意をして参りましょう。四人で晩御飯をいただければ、きっと、楽しいし、それに、おばあさまのところには囲炉裏があるでしょう。

私、囲炉裏を囲んで晩御飯って憧れますわ

機屋 遠火で干物の魚を焼いて、自在鉤には具沢山の味噌汁、灰に熱燗、じんわりといいなあ

染め屋 もう、お姉さまったら。私と同じ顔で、おっさんっぽいこと、言わないでください

機屋 （笑って）、ごめん、ごめん

染め屋、笑って。

染め屋 今日の晩御飯担当は私ですから、これから、台所で準備してきますわ。そうだ、オトギリソウもいづらか持って行って、煎じてお茶にしましょう

間

機屋、小さく吐息を漏らして。呟くように。

機屋 元気だなあ

恵子 染め屋さんのことですか

機屋 まあね

恵子 機屋さんって、なんだか、染め屋さんが苦手みたい。あ、ごめんなさい

間

機屋、困ったように。

機屋 そういうことはね、思っても言っちゃだめ

機屋、くすぐったそうに笑う。

機屋ほんと、まいったなあ・・・。（掛け声）、よいしょっと。さて、恵子ちゃん、機織、ちょっと実演してあげようか

恵子　お願いします。楽しみ

菊江独白　電話を切る。壱子さんがすっかり気鬱でふさぎこんでいるらしい。急に子供をなくしたのだ、それもそうだろうと思う。ただ、気になること、壱子さんは、幸の骨を食べてしまった恵子を鬼だと思い込んでいるらしい。なんだろう、鬼という言葉にあまり思い出したくなかったこと、正面から考えたくなかったことがどうしてもなく浮かび上がってくる。

菊江　（勢い良く、澆刺と）なにをひ弱なことをおっしゃるのでしょうか、一郎様は。だだだだっ、この国を護るため、鬼など、蹴散らしてやればよろしいのです。一郎様が祖国の英霊となり、私の元にお戻りいただけなくとも、私は一郎様の妻として、恥ずかしくないよう生きてまいります。（声を落として）君は勇ましいなあと言う哀しげな笑みの意味を今にしてわかった気がします。単純すぎるほど単純なこと。例外なく、すべての命はとても大切なのだという、それだけのことが今の今までわかっていなかったのですよ。あなたが畑の雑草を抜くのが辛いと齒を食いしぼるのを笑ったこともありました。どんなときでも声を荒げることはなく、君は勇ましいなあと笑顔でいてくれたあなたの気持ちに私はもっと寄り添っていればと、今になって悔いております。

機屋と恵子

ひゅんひゅんと風を切る音がする。

機屋　こうやって糸車を回すんだ。そうするとね、手の中の綿が糸になって糸車に巻き付いていく。

恵子　ほどけないの、その糸は

機屋　よりがかかっているからね、簡単には綿には戻らないよ

恵子　なんだか、凄いなあ、指先から糸が飛び出してくるみたいだ

機屋　指先の力加減や指の向き、これを手の内と言ってね、手の内で調整する。うっかりすると糸が太くなったり、細くなったり、切れてしまうこともある。指先のすり抜けていく感じでね、同じ太さの糸を巻いていくんだ。

恵子　この糸が白色じゃなくて、赤色なら運命の赤い糸だね

機屋　それは困った。上手くなればなるほど、糸が長くなってしまう

恵子、笑って。

恵子　それは、大変だ

機屋　ああ、とっても大変だ

糸車の廻るひゅんひゅんという音。

機屋　恵子ちゃん

恵子　はい

機屋　こうやって、糸を指先から繰り出しているとね、うっかり糸を切ってしまったとき、あ、ごめんなさいって思ってしまうんだ

恵子、不思議そうに。

恵子 ごめんなさい

機屋 うん。この白い糸が命のつながりを示していてね、うっかり命を切ってしまった、そんな気になってしまうんだよ

恵子 命を切ってしまう

機屋 昔、学生の頃さ、付き合っていた男がいて、そいつを妹に取られてね。なんであんなにまでしたんだろう、包丁で妹を刺してしまった、妹の糸を切ってしまうところだった。ああ、どうしたんだろう。こんなこと、恵子ちゃんに話すなんて。かっこわるいなあ

恵子、落ち着いて。

恵子 よく告白しました。機屋さんの頭を優しくなでてあげましょう

少し哀しげに笑って。

機屋 まさか、この歳になって、頭をなでられるとは思わなかった

恵子 私は頭をなでられるのが大好き、気持ちがやわらかくなるから

機屋、吐息を漏らして。

機屋 なんで、こんな話をしたんだろうな。誰にも言ってなかったのに

恵子 多分、それは私が、一人の人格者として聞き上手ということなのかもしれませんな

機屋 それは、まいった

機屋と恵子、笑う。

恵子 ばあちゃんちに来てから、晩御飯の後、おじいさんの話をいつもしてくれる。それを聴くとばあちゃん、今もおじいさんのことが好きなんだなあって思うんだ

機屋 少し聴いたことがあるよ。一郎さんだったかな。戦争から帰ってくるのが絶望的だと言われていたのが、戦争が終わって1年、ふいっと帰ってきた。結婚せずに待っていて良かった、ほっとしたよって笑いながら言っていた

恵子 引く手あまたで、見合いの話が山盛り、もうちょっと待ってみよう、もうちょっと待ってみようって、本当に待っていて良かった。でないと、恵子はこの世におらなんだかもしれないんだからって、昨日の晩も言われた

機屋 ばあちゃん、様様だね

恵子 朝から、水汲みや畑仕事、ずいぶん、ばあちゃん孝行させていただきました、少しは恩を返したつもり

機屋 戦争から帰ってこれなかった人たちも沢山いるし、遺骨になって帰ってきた人もいますとか。生きて帰れただけでみつけものさ

一郎、戦地にて。

一郎独白 俺は人を殺した、殺したのだ。銃撃の中で、俺はたまたま、生き残ってここにいる。沢山の同胞が死んでいった、その同胞達は奴らの銃弾で殺されたのだ。そして何よりも、俺の撃った、その銃弾も奴らを殺したのだ。こんなことはありなのか。許されざるものではないか。命を奪い合う、俺の命を奪われぬため、奴らの命を奪うのだ。俺には祖国で待つ人がいるのだ、し

かし・・・。

それは、奴ら、いや、彼らも同じではないか。俺と同じように祖国に待つ人がいてくれるのではないか。そんなことに考えをめぐらせるような奴は生きてはいられないかもしれない。でも、考えないではいけない。

俺の父親が、母親が銃弾に貫かれて殺される、それを俺は国のためと受け入れることができるか、もしも、俺に子どもが居り、その子どもが銃弾に貫かれ死ぬことを俺は戦争なのだからと受け入れることができるのか、死んでこいと言えるのか、命とはそれほどのものなのか。俺の同胞を殺した彼らにも、子どもが居り、親もいるかもしれない。彼らか思う命の大切さと、俺が思う命の大切さとにどれほどの違いがあるのか。国のため、非国民と排除されぬため、殺しあうのは正しいことなのか。

すずめのさえずる声。

菊江独白 あれから六十年以上の年月が流れました。私はこんなおばあさんになったというのに、貴方は若いままで、不公平ですよ。折に触れ、貴方が私におっしゃったこと、僕は弱虫で意気地なしかもしれないけれど、少しは、なんていうのかな、命の大切さを知った気がする、どうして、誰も命の大切さを知らうとしないのだろうね。命が大切くらい、誰でも知っておりますよ、だって、私、死にたくありませんし、貴方もこの子も死んで欲しくありませんもの。貴方は困った顔をして、それでも、ん、そうだねと笑みを浮かべてくださいました。ほら、貴方。私の手の届くところにすずめが居ります、くちばし一杯に、いくつもの枯れ枝をくわえていますよ。人に近づかないすずめが手を伸ばせはすいっと掴むことのできる場所にあります。巣を作るための小枝集めに必死なのでしょう、私の姿が目に入らないくらいなのですから。（間）こんな小さな鳥でさえ、必死になってひなを育てようとしているのです、命を繋ごうとしているのです、きっと、貴方は今の私と同じように、すずめに気づかぬ振りをするでしょうね。貴方は本当に口下手なのです、だから、私は貴方という人を知るのに、時間がかかってしまい、すっかり、こんなおばあさんになってしまったではありませんか。

三人の会話、

染め屋 そう、お姉さま、お話になったのですか。

染め屋、少し、笑って。

染め屋 ちょっと、上着をたくし上げますとね、刃渡り五センチの包丁の刺し傷ですわ。脇腹の、ほら、端ですから、血は溢れましたけど、こうやって、命取りとめて生きております。なんだか、こうやって傷を見ておりますと、うずうずして、お姉さま、また、私を傷つけてくださいませ、だって、とっても気持ちが良いのですもの。いつも、そう、お願いしておりますのに、お姉さまったら、無口になって俯いてしまわれるのですよ。へんなお姉さま。ほら、またですわ

機屋 それ以上は、もう

染め屋 私と同じ顔が敵意を剥き出して襲ってくる、これは他殺になるのだろうか、でも、私的

には自殺のようにも思える。これはなんと特別な瞬間なのだろう。私達双子にのみ許された瞬間なのです。

本当、お姉様ったらひどいのですわ。だって、幾度、私を刺してくださいませと包丁をさしだしお願いしても、お断りになるのですもの

恵子、強く。

恵子 だめだ、染め屋さん

染め屋 あら、どういうこと

恵子 命をおもちゃにしてはだめ

染め屋、押し殺した声で。

染め屋 私の命、奪おうとしたのはお姉さまですわ

恵子、しっかりと。

恵子 それでも。だめなものはだめ。とにかく、だめなものはだめ

染め屋 どうして、だめなわけ。理由を言いなさい

恵子 理由はいえない

染め屋 どうして

恵子 理由を言えば、染め屋さんはその理由の抜け道を探そうとする。理由を否定しようとする。でも、命の大切さはどんな理由があつたってかわらない、だから、だめなものはだめなんだ

染め屋、大げさに溜息をついて。

染め屋 高校生の女の子なんかに、まっすぐ意見されてしまいましたわ。お姉さま、たまには恵子ちゃんのようにしっかりした子もいるのですね

染め屋、くすぐったそうに笑う。

染め屋 正面から、まっすぐ言われては仕方ありませんわね。こんな、面白い子、夏休みが終わったら帰ってしまうのかしら、さびしいわ

恵子 ううん、夏休みが終わっても、ばっちゃんちに居る、ここで暮らすから

染め屋 あら、それは楽しそう

機屋 学校はどうするんだ

恵子、戸惑うように、でも決心して。

恵子 高校は義務教育じゃないから、大丈夫です

機屋、探るように

機屋 高校中退ってこと

恵子 そうです

機屋 うーん。ばあちゃんに少し聞いている。妹が亡くなってから、お母さんと関係が難しくなってしまったとか

恵子 いまは離れて暮らす方が、母さんのためでもあるし、私のためでもあります

染め屋 お姉さま

機屋 え

染め屋 お姉さま。私も、私が先に死んだら、同じことをしていただいて結構ですわ

機屋、当惑して

機屋 同じことって

染め屋、少し笑って

染め屋 なるほど、そこまでは、おばあさまからお聞きになっていない様子。なら、言わないでおきます

恵子 染め屋さんと私の秘密です。

染め屋、うふふと笑う。

恵子、うふふと笑う。

機屋 ああ、面倒な妹が二人になったみたいだ

間

恵子 やりすぎると機屋さんにしかられますね。あ、この書類、「作業着作成、農業文化再興を鑑み」って、ばっちゃんの言っていた地域振興のってやつ

機屋 ああ、それ。あたしらがここに来た理由の一つだよ。昔は農作業するときは、紺染めのモンペとかはいていたわけだけど、今はたいてい、何処でも売っているような工場の作業着だ。これをね、伝統的な緋の技法で新しい作業着っていうかな、野良着を作り出そうってのが、格安でこの家を借りている私らのお役目

染め屋 これって、採算、合うのかってものですけどね

機屋 私が織る緋ってのはね、昔の普段着用の着物なんだ、大島紬とか、何百万もする紬の着物とは違って、普段着や仕事着に使われていたものでね、破れれば接ぎなおし、繰り返し修繕して、最後は雑巾、いや、ほつれた糸を灯明の芯にまでしたのが緋という着物なんだ

恵子 機屋さん、とっても嬉しそう

機屋 そうかなあ、好きだからね。使い捨てって嫌いで、最後の最後まで大事に使わせていただくのが好きなんだ

染め屋 多分、上から羽織るはっぴみたいなものか、エプロンや割烹着みたいな形になります、それを染めるのが私のお仕事です

恵子 ばっちゃん、喜びそうだ。ばっちゃんって本当はおしゃれなもの

染め屋 喜んでくだされば嬉しいですわね。藍染の紺を基本に、オトギリソウの赤を、少し入れてみようと思っています

恵子 このオトギリソウって緑色をしているよ

染め屋 血のような赤色と申しますと、また、お姉さまをいじめてしまいますわね。オトギリソウは季節によって、鉄の赤く錆びた色になるのですよ、そのときの色をいただくつもりです

恵子 私もそういうのやってみたいなあ

染め屋 なら、私たちの弟子になりなさい。まずは洗濯、ご飯の用意、家の掃除からと、こき使ってあげますわ

恵子 ええっと、じっくり考えさせていただきます

染め屋、笑って。

染め屋 面白い子

ぐつぐつと煮炊きの音。菊江独白。

菊江 多分、機屋も染め屋ちゃんも恵子を送りがてら、やって来るだろう。多めにご飯を炊いておくか、余ればおむすびにして持ち帰らせればいい。二人は飲むんだっただけ、なら、爛もしておくかね。

面白いものだと思う。少しわくわくした気分にいる。長く一人でご飯を食べるのが当たり前になって、恵子が来た。今晚は四人で晩御飯を食べることになるだろう。おくどさんの火を見ながら、ああ、そうだ、あの頃もそうだった。

ご飯を炊こうとおくどさんの加減を見ていると、あの人は、どんなものだろう、私も何かしようかと毎度のように覗きに来る。それなら、お味噌汁の具にしますから、たまねぎを切ってください、そういうと、嬉しそうに笑みを浮かべて、そうするよと答えてくれる。

君といるとね、気持ちがやわらかくなってね、どんなに昼間、大変でも、君と晩御飯を食べるって思うと頑張ることが出来るんだ、ありがとう。

多分、あの人はとことん辛いものを戦争で目の当たりにしたのだろう。今にしてそう思う。様々な疑問を背中一杯背負って、自分自身を作ったのだろうと思う。いつだったか話してくれた。大東亜戦争、太平洋戦争と呼ぶことに決まったようだけれどね、その前の満州事変から数えて、太平洋戦争まで、十五年間日本は戦争をしていたわけだけれど、君や僕が戦時中に教育を受けた、その教育を授けてくれた先生達は、その時幾つだったろうね、彼らが学校教育を受けてたときから、鬼畜米英なんて教えていたのかなあ。全然、そうじゃなかったんじゃないかなあいま、統治者 マッカーサーに手紙を送る人が多いらしいよ。お礼の手紙をね。征服してくれてありがとう、民主主義をありがとう、戦争を終わらせてくれてありがとうってね。

当然その中には、神国日本を鬼畜米英から守れと口角泡を飛ばしていた人たちもね、いたりするんだよ。つまりは何もかもわかっていて迎合していたのだろうね。彼らには自分や身内以外の命は紙くず同然だったのかな、やるせないね。すべての命はとても大切なものだと思うんだけどね。ごめん、嫌なことを言ってしまった。恐縮したように、貴方は俯くと、少し笑みを浮かべて、たまねぎを器用に切り出した。本当に良いたまねぎは涙が出ないんだよ、先ほどまでの話など忘れてしまったように、小さく笑みを浮かべてくれていた、ごめんねって呟きながら。

多分、私はあの人が帰ってきてくれて、たとえ三年だけでも、一緒に暮らすことが出来て本当に良かったと思う。もしも、帰ってきてくれなかったら、私は悔やんだだろう、あの人を戦争へと背中を押しやった自分自身に。

自分を責めながら一人、死にたい死にたいと躁言を重ねていただろう。

扉を強くどんと叩く音。

逸子 お母さん、開けて、開けてください。

菊江独白 逸子さんの声だ。慌てて扉を開けによると、目の前に、唇をぎゅっと引き締めた逸子さんが仁王立ちで目の前にいた。

逸子 お母さん、無事で良かったです。鬼は、鬼は何処にいますか

菊江 鬼って、逸子さん、あなた。まあ、いいから、入りなさい

菊江独白 囲炉裏を差し向かいに、逸さんと座る、逸さんの右手には出刃包丁が、出刃包丁
って

菊江 その包丁はどうしたんだい

逸子 これですか。これは鬼を成敗するための神聖な刀です。そして桃を買ってきました。桃は
神聖な果物です。きっと、この桃を投げつければ、邪悪な鬼は桃の当たったところから、じわじ
わ腐り始めます、そして奴が弱ったところを、この刀で切り裂いてやるのです。鬼が滅びれば、
幸も恵子もきっと成仏できるのです、いえ、二人が私の元に帰って来ることが出来るかもしれま
せん、この両手に二人を抱きしめることができるのです

菊江 あのね、逸子さん。あなた、なにか言っていることがおかしいよ。

逸子 ということですか、お母さん。はっ、そうか、お母さんはあの鬼にだまされているので
すよ。あれは、恵子ではありません、お母さんの孫ではないのですよ。あれは恵子に化けた鬼な
のです。お母さん、だまされてはなりません

菊江独白 逸さんの目が変に座りだして、顔が歪んでいく。まるで鬼のような。これはまるで
、逸さんが鬼になったようだ。どうしてだろう、変に心が落ち着いてゆく、それは多分、この
顔に見覚えがあるのだ、鬼畜米兵と叫んでいた、私や多くの無邪気な大勢と同じなのだ。無邪気
、邪の無い気持ち、とんでもない、それは、恐ろしい鬼の顔だ。

逸子 わかりましたよ。お前も鬼ですね。お母さんの皮を被った鬼なのですね

菊江独白 逸さんが両手で出刃包丁を持ち直し、片膝を立てた。どうしてだ、恐ろしくはない
、とても哀れで、逸さんが哀れでしかたがない。あの人もこんな私を前にして、優しくしてい
てくれていたのだろうか

逸子が叫ぶ。

逸子 鬼め、成敗してやる

恵子が叫ぶ。

恵子 だめっ、お母さん

菊江 逃げな、恵子

菊江独白 逸さんが恵子に向き直り走る、機屋、機屋が恵子の前に飛び出した、うわああっ

間

染め屋、落ち着いて。

染め屋 ほんに馬鹿なお姉さまですわ。私との違いはお腹の傷ですのに、その傷まで同じになっ
てしまっては、どちらがどちらかわからなくなってしまいます

機屋 ごめん

染め屋、大袈裟に溜息をついて。

染め屋 体当たりしたくせに、包丁がそれてかすり傷なんて、一生、笑ってやりますわ、お姉さ
まのこと

機屋 そんなに言わないでよ

染め屋 では、言いません

機屋 えっ

染め屋 嫌なら嫌と言えればいいんです、黙ってしまったら、なんだか、腹が立って、余計に言いたくなるんです

機屋 そうか、そうだよね、ほんと、そうだ

染め屋 恵子ちゃんのお父さんと警察が来て、みんな、無事で奥の部屋です。気を失っていた愚かな姉を心配して、寝顔を見ていた優しい妹がここにあります。何か言うことはありませんか

機屋、少し笑って。

機屋 ありがとう

染め屋 お姉さま、正解です。どういたしまして
二人、少し笑う。

終わり